

庭野平和財団助成事業報告書

被助成者：公益財団法人とよなか国際交流協会

コード番号：12-A-022

多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクト（EMP） （別名「トモダチ作戦」）

◆活動の背景と目的

とよなか国際交流協会（以下、協会）は、「市民の主体的で広範な参加により、人権尊重を基調とした国際交流活動を地域から進め、世界とつながる多文化共生の社会をつくる」を理念に掲げ、1993年、豊中市によって財団法人として設立され、2012年4月1日からは、公益財団法人に認定された公益目的事業を多くの市民協働者とともに展開している。また、協会設立と同時に豊中市によって設立されたとよなか国際交流センターの管理・運営も行っている（2011年度より指定管理者となる）。

協会事業は、地域や学校をパートナーに「地域づくり」「人づくり」を推進しながら総合的な外国人支援の「しくみづくり」を目指す27事業で構成されている。柱となるのは、地域に住む外国人のための日本語交流活動、多言語スタッフによる相談サービス（タイ語・フィリピン語・スペイン語・ポルトガル語・韓国・朝鮮語・中国語・英語）、外国にルーツをもつ子どものためのサポート事業などである。特に外国人にとっての「安心やエンパワメント（なくされた力を取り戻すこと）」「自己肯定感」「ピア（同じ立場の仲間）やロールモデル（目標となる生き方のモデル）の育成」などが重視される。

子どもサポート事業が展開される背景には、豊中市が外国人の少数点在地域であることから外国にルーツをもつ子どもたちが同じような背景をもつ仲間に出会うきっかけや、自分の文化的背景を積極的に押し出せるような機会が少ないことがある。そこで、母語や母文化の学習を通じて、仲間と出会い、自尊感情を高めるための「子ども母語」（インドネシア語・スペイン語・ポルトガル語・中国語）、大学生ボランティアと勉強や表現活動を行う「サンブレイス」などが実施されている。豊中市教育委員会との協働では、2006年より外国につながる子どもやおとながつどい、交流を深めるための「多文化フェスティバル」が年に1回開催されている。

豊中市には、1970年代頃から在日韓国・朝鮮人教育や帰国児童生徒教育に熱心に取り組んできた土壌があり、近年はいわゆる新渡日の子どもの教育にも目が向けられてきた。しかし、多文化な子どもたちが文化的な背景を押し出して自分を表現することのできる場や機会はまだまだ少ない。他方で、従来のような「外国につながる子ども」と一括りにすることができない現実が、子どもたちの生活実態や意識において現れ始めているのも事実である。外国人の定住化や国際結婚、日本国籍取得などの増加により、地域には、日本生まれ・日本育ち、ダブルの子ども、日本国籍の子ども、また母国と日本を往来する子どもなどが増えており、生育環境、家族形態、国籍や名前において、グローバルに多種多様な「外国につながる子ども」が存在している。そうした「外国につながる子ども」は、国家、国籍、ルーツ、ことば、文化等がひとつに固定されず、特定の活動や特定の枠組みに当てはまらないがゆえに、潜在化する傾向にある。

多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクトでは、これまでの社会や活動が前提としていた特定の「枠組み」をいったん捨て、「枠組み」以前の「日常」からスタートしようと、外国につながる子ども・若者たちの表現活動に取り組んだ。具体的には、インタビューを通じた映像作品制作の中で、それにかかわる外国につながる子ども・若者たちが、多様な文化の織りなす自分自身を積極的にとらえ、さまざまなかたちでの発信方法を身につけると同時に、作品を通じて潜在的に数多く存在するであろう「外国につながる子ども」たちの出会いの場を創造することを目的として実施した。

また、「ハーフ」「ダブル」「混血児」「外国人」等についてのイメージや価値観を主流メディアから一方的に「与えられる」のではなく、自らが表現し発信者となるための方法や力を獲得し、実際に発信していくことで、マジョリティ社会へ価値観の問い直しを提起することも目指した。

◆研究活動の内容と方法

このプロジェクトは、あるひとりの「混血児」の提案／との「対話」から始まった。

——「混血児」って相当数いるはずなのに、それが日本社会のなかで見えてこない。本人もそれを隠したり否定したりしながら、自分が「混血児」って気づいていない。そんなやつらにはたらきかけて、「覚醒」させて、そうして「覚醒」させられたやつらがまた他の「混血児」たちを「覚醒」させてってというような、そんなしかけをつくりたい。それをできるのって、今の時代、やっぱりメディアかと思う。たとえば、you tube みたいな。you tube にアップした映像を見た人が何かを感じ取って、また次の人たちにメッセージを伝えていくような映像作品。延々につづいていくような、トモダチがどんどん増えていくような、そんな映像とか、なんかよくない？ ——

そうして、「トモダチ作戦」（多文化子どもエンパワメント・メディアプロジェクトの別名）が始まった。（*本プロジェクトでは話し合いの結果、あえて「混血児」という表現を使用している）

スタートアップメンバーには、本プロジェクトの趣旨に賛同する外国につながりをもつ若者（アメリカン、フィリピン、在日韓国・朝鮮、スリランカなどにつながりをもつ）及び日本人、メディア・リテラシーを専門に研究する教員等が加わり、以下の内容と方法でプロジェクトを実施した。

（1）研修及び「対話」

外国につながる子どもや若者、日本人からなるプロジェクトスタッフが、表現やメディアについて学ぶ機会をつくった。また、「外国人」とあるとはどういうことか。スタッフそれぞれの立場や経験、思いを共有し、表現する、「対話」作業を進めた。

（2）映像作品制作

「ハーフ」「ダブル」「混血児」等外国につながる子ども・若者を対象にインタビューを実施し、それらを映像におさめた。インタビュー項目は、自身が外国につながる若者であるスタッフたちが、同じく外国につながる子ども・若者に尋ねてみたいことを話し合って決めた。

(3) 映像作品の上映

インタビュー記録を編集し短時間の映像作品にした。それらを外国につながる子どもや若者が観る機会を提供すると同時に、広く一般に公表する場を設けた。また、メディア・リテラシー講座の教材としても使用することで、オルタナティブメディアとしての可能性を探った。

(4) 「トモダチ作戦」

映像作品を観た人たちが、このプロジェクトに関心を持ち、スタッフになって制作にかかわるようなはたらきかけを行ったほか、多文化な子どもたちが出会い・交流する場を今後継続してつくっていけるようネットワーク化を進めた。

◆活動の実施経過

具体的な実施内容については以下の通りである。

【8月】キックオフ会議

研修①「メディア・リテラシーと『外国人』」講師：田島知之さん（京都女子大学他非常勤講師）

従来のメディアが社会の中でどのようにつくられ、機能しているかについて講師より研修を受け、「外国人」である若者自身が抱くメディアの「外国人」像に対する違和感や日常生活における「外国人」としての経験を話し合った。その中で、なぜ、「トモダチ作戦」をするのかという本プロジェクトの趣旨と方向性を確認した。また、本プロジェクトでは、「外国人（純血）」ではなく「混血児（ダブルやクォーター等）」に焦点を当てることの意義を議論した。

- ・ 自分と同じようなルーツをもつ人たちが潜在化している、見えなくなっている
- ・ このような経験や思いをしているのが自分ひとりのように思ってしまう、孤独
- ・ どの集まり（国による、ルーツごとに分けられた活動等）に参加しても、自分のための場所ではないと思ってしまう、はみ出し感
- ・ 周囲や社会に自分のルーツのことを隠してしまうことで、本人さえも違和感や疎外感がどこから来ているのかわからない

【9月】それぞれのメディア史のふりかえりと経験の共有

メンバーそれぞれのメディア史を振り返り、何に関心を持っているか、どのような表現活動を行っていききたいか、互いのことを知り、歩み寄れる地点を探した。

●作品の共有：それぞれの好きな映像や音楽など、表現作品をみんなで鑑賞した。

●「混血児」としての経験の共有：外国につながる若者同士「あるある！」「わかるわかる！」と意気投合するが、それ以外のメンバーには「わかるけれど、もう少し具体的に言ってくれないとわからない」「これはどういう気持ち？」など、説明が必要なことがわかる。メンバー内で共通言語を創っていくこと、歩み寄っていく作業は、先が見えず時間を要するが、表現活動を行う上で重要なプロセスであった。

- ・ 「混血児」が見ている世界をもっと掘り下げていきたい
- ・ 「きっぱりすっぱり分かれている世界（AかBか）」とはどういうことか？
- ・ 自分がどちらにもあてはまらない（居場所がない）という感覚、違和感、疎外感、孤独とは？
- ・ ふだんから鎧を着ているような感覚とは？
- ・ 違和感や疎外感を感じている人が、自分以外にもいることを伝えたい

- ・ 自分以外にも同じ思いでいる人がいることを伝えるためには？どのような映像がいいか？

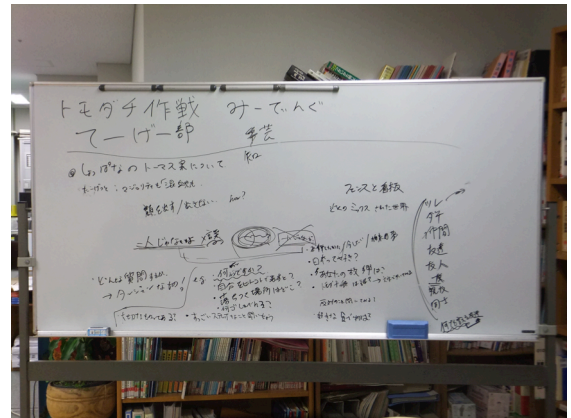
【9月～12月】インタビュー・撮影・分析・編集

●映像のメッセージと内容：同じ思いでいる人に「ひとりではない」というメッセージを伝え、同時に「混血児」の中の多様性＝「カオス」を示すような映像作品にすることに決める。インタビュー項目をメンバーで考える。

●インタビュー（撮影）：協会に集まる「混血児」やそれぞれのネットワークを駆使しインタビュー協力者を募り、インタビューを行った。

●インタビュートランスクリプトの分析：映像をトランスクリプト化し、メンバーで見ながら大事なところを抜粋して、映像編集の構成を検討した。

●映像編集



【10月～2月】上映

●10月21日：とよなか国際交流協会イベント「国際交流と人権を考えようパート2」で上映
編集途中段階ではあるが、多くの人が集まる場で映像を上映する。映像作品名は「トモダチ作戦～ここにいるよ～」。

●12月1日：とよなか国際交流協会と立教大学生（ゼミ担当教員：登丸あすかさん）との交流
メディア・リテラシー研究者である登丸あすかさんのゼミ生による「CMに見る『外国人・文化』」のプレゼンテーションの後、「トモダチ作戦」の映像作品を上映し、意見交換、プロジェクトの趣旨や外国人としての経験などを語り合う場を設けた。

●2月17日：とよなか国際交流協会 2012 年度事業評価会での上映

外国人支援にかかわる協会ボランティア、役員、また豊中市の担当部職員等が集まる場で、映像作品を上映し、外国につながる若者たちの姿を広く見てもらった。（*感想については後段に記載）

【12月～4月】DVDの製作

上映会を開催する以外にも、関心をもつ人たちに手にとってもらい観てもらえるように DVD 作品にすることを決め、パッケージを整える作業を行った。タイトルを『ナニジン？ートモダチ作戦』改め、DVD のカバーデザイン&印刷、パンフレット作成&印刷、広報用ポストカードのデザイン&印刷などを行った。

研修②「オルタナティブメディアの可能性」講師：田島知之さん

この映像作品が、外国人の子どもや若者へのメッセージであると同時に、「ハーフ」「ダブル」「混血児」「外国人」等についてのイメージや価値観を主流メディアから一方的に「与えられる」のではなく、自らが表現し発信していく「オルタナティブメディア」の可能性があるとこの側面を自覚するための研修を行った。



◆活動の成果～外国にルーツをもつ若者の自己表現・映像制作
『ナニジン？ートモダチ作戦ー』（DVD、放映時間 10 分）



ハーフ、ダブル、ハイブレッド、混血児…？

同じ悩みを語れる人が見つからない

居場所が見つからない

そんなあなたを待っています。

この映像は出発点です。

一緒にこの続きをつくりませんか？

「トモダチ作戦」とは？

自分のような存在が他にもいることが見えず、孤独を感じる「混血児」は少なくありません。居場所を見つけることができず「はみ出し」ている感覚を覚えたりします。そういっ

たなぜ自分がかかえなければならないのかわからないけれど、とりあえず周りに合わせて自分を隠したりもします。

わたしたちは、見えなくされている「混血児」の存在に「混血児」自らが光をあて、「混血児」同士がめぐりあい、つながっていくきっかけをつくりたいと考えました。そのために、映像をつかった表現プロジェクトをスタートさせました。

誰かから一方的に「ハーフ」や「ダブル」のイメージを「与えられる」のではなく、自分たちで自身の姿をつくりだし、発信する。それによって、作品を見た人たちに“むずむず”してもらいたい。そこから何かを感じとってくれた人たちとつながっていききたいのです。

それが「トモダチ作戦」です。

この映像は、「はじまり」です。これを見て“むずむず”したあなた、一緒にこの続きをつくっていきませんか？

*ここではあえて「混血児」という言葉を使っています。

【映像作品を見た人の感想】

●ブラジルにつながりを持つ若者の感想

答えはない。自分が思う「ナニジン」「ふるさと」と、他人が思う「ナニジン」「ふるさと」が違う。「ナニジン？」と聞かれて期待される答えがある。勝手に決めつけられると、イラッとする。自分がいくら考えても出てこない質問をされて気分が悪い。一言では言い表せない。大切なのは自分が何ジンじゃなく何をしようとか何がしたいかが大切だと思う。

エピソード

今年の2月に初めて会った仕事の人に「あなたは何ジンか？」と質問された。その時、自分は「日本とブラジルのハーフ」と答えた。自分でもちゃんと分かっているわけではないのにそう聞かれると気分が悪い。でも、その人に悪気があったわけでもないし、親が悪いわけでもない。だからこそ聞かれたら余計辛い。

学校で初めて会った友達には自分の事を日本人とかブラジル人とかハーフとか色々な考え方をしている人達がいるから、自分が何なのか余計に分からなくなる。

だからといって自分が混血児という事を隠すつもりはこれからもこの先もない。

●フランスにつながりを持つ若者の感想

混血児？にしか分からない

自分が何ジンかよく分からないモヤモヤした

気持ちが少し分かったような気がしました

いくら考えても答えが出ないという所が物凄く考えさせられ深いと思いました

●事業評価会での上映の感想

- ・ 空白を出す作りだから、そこに見てる人の立ち位置やこれまでの意識が出るのかなって。一人でも皆とでも見たい映像だと思いました。
- ・ 問いや答えよりもそれを聞いた人の反応や間を大事にしてる感じがして、それがすごい好きでした。観終った後、一通り感じ入っていると、向かいのグループから、「何が伝えたいのかわからないんですね」という会話が聞こえてそれも面白かったです。たぶん悩んでいる映像を長く映していたので、この映像でこうした方向の悩みを初めて知る人は何かを求められているように感じたのかな？って考えました。
- ・ ナニジンといった質問は本当に深いと思います。◎◎人ですと答えると「へー」「じゃあ◎◎できる」や「よく◎◎食べる」とか、イメージをぶつけられることが多くあるので、聞かれた方がどれだけ嫌な気持ちになっているのかも知らずに気楽に聞いてくることはよくないと思っています。映像に参加している皆さんは本当の自分を映し出していて感心しました。ルーツ、国は子どもたちにとって気楽に聞くようなことではないかもしれないとあらためて、この映像を見て感じました。
- ・ インタビューを受けている人の質問に対する言葉というよりも、その質問に対する「反応」が、その人の悩みやこだわりを訴えかけてきます。「映像」の力だと思います。
- ・ シンプルないくつかの質問と答えからその人の心が見え、何を求め、何をかかえているかわわってくる。続きが楽しみな広がりのある映像です。「創る」意味は大きいですね。
- ・ いろいろと考えることがありました。私も日本生まれフランス育ちなので、「何人？」と聞かれると私もすごく迷います。「ふるさとはどこですか？」の質問にもすごく迷います。その質問には私はやっぱり「フランス育ちの日本人」「ふるさはフランスですが生まれは日本です」と答えます。なんか、ふくざつです。
- ・ すごくいい映像でした。本質的だけど簡単な質問とその人から出てくる言葉をつないでいくだけでこんなにいろんなメッセージを発信できるとは驚きです。さらに発展していったら素晴らしい。
- ・ 「ナニジン」という事が意味を持つことに気がつかなかった。友だちづくり、居場所づくりは私自身も悩むところです。

◆「トモダチ作戦」—プロジェクト、そのプロセスで得たもの

●外国につながる若者の発信力の獲得・エンパワメント

本プロジェクトは、「ダブル」「ハーフ」「ハイブレッド」「混血児」など、外国につながる子ども・若者たちが、社会の中で自分たちの存在が「ないもの」「見えないもの」として扱われていることに対して、自ら「つながり」を求め、同じような経験をしている人たちに向けて「ひとりで

はない」というメッセージと自分たちの姿を発信したいという思いからスタートした。これは、主流メディア・既存のメディアが映し出さない（映し出しても一方的に「与えられたもの」である）存在（＝マイノリティ）からの発信だと言える。したがって、プロジェクトがスタートした当初から「ダブル」「ハーフ」「ハイブレッド」「混血」等「外国人」のステレオタイプをできるだけ除外し、「枠組み」を設定せず、既にそこにある「日常」からスタートすることを重視した。「日常」や「経験」をメンバーで共有し、そこから作品として何を伝えたいかを、ディスカッションや対話の中で決めていった。メンバーで共有していたことは、作品をつくることが目的ではなく、作品が与える影響や製作過程で生み出される「つながり」や「対話」であるということであった。メンバーからは、「ここまで自分の関心に根付いたものをつくったのはすごい」「つくるプロセスが“むずむず”であった。つくるプロセスで、とことんいっぱい考えた」という感想が出ている。プロジェクトを通じて発信力・対話力が獲得され、外国につながる若者自身がエンパワメントされた。

●潜在化する人たちをつなげるコミュニケーション

映像作品は、メンバーによる10人近い「混血児」へのインタビューを編集したものである。インタビューも「混血児」であるということから、インタビュー協力者がふだん見せない顔を見せたり、考えを素直に口にすることが多くあった。また、インタビューを受けた後に再度考えを整理してそのことを伝えてくれる人、自分以外の協力者がどのような意見を言っているかに関心を持った人などもいた。作品を観た外国につながる若者たちの中には、このプロジェクトに賛同し応援してくれる人たちも現れ始めている。ひとつの作品をきっかけに、潜在化する人たちが自分に宛てられたメッセージとして捉え、考え、対話し、つながるしくみになったことは、大きな成果と言える。映像作品自体が、一方的な押しつけのメッセージではなく、観た人に感じ、考えてもらう対話のネットワークに入ってもらいたいという意図で作られているためであろう。こうしたコミュニケーションの可能性は、今後さらに探っていく課題でもある。

●マジョリティの価値観を問い直すオルタナティブメディア

外国につながる若者当事者からの映像作品制作・発信は、主流メディアが決して映し出さない姿を発信しているという点で、それを観た人びと（マジョリティ社会）の価値観を問い直す機会となった。いくつか上映会を行ってきたが、そこではマジョリティとして生きてきた人たちから、気づきがあったという意見や、自分の中に潜んでいた経験や思いが引き出されたという感想があり、「社会」が（わたしたちの価値観が）どのように作られているかを問い直すオルタナティブメディアの可能性が見られた。「ナニジン？」という問いは、「外国人」にだけされるものではなく、それを観たすべての人へ「あなたは何者か？」という問いでもあった。

◆今後の課題

●映像作品（DVD）を通じたさらなる対話・コミュニケーション

さまざまな場所で上映会を実施したり、大学や学校などの教育機関で教材として活用されたりするなどして、映像作品へのレスポンスや対話・コミュニケーションを進めていく。その過程で、マジョリティの価値観の問い直し、及び、外国につながるをもつ子ども・若者たちが「つながる」ネットワークを構築していくことを課題としたい。

●社会への提案

「外国につながる子ども」たちを潜在化させ、子どもたち同士が繋がりにくくなっている（ディスエンパワーされている）社会的な要因についてマジョリティ側が捉えなおす視点を導入していく必要がある。その上で、本プロジェクトのような若者・子どもたちの表現活動を「対話の場」として捉え、そこから生まれる「社会への提案」のエッセンスをしっかり受け止め、あらたな事業や施策につなげていくことを課題である。

●さらなる作品づくり&子どもたちの出会い・交流の場づくり

表現活動は1年や1回限りの取り組みで終わるものではない。むしろ、多文化な子どもたちにとって、それらは尽きることのないテーマであり続ける。今後も活動を継続し、潜在的に多く存在する「外国につながる子ども」たちがいつでも来れる場づくり、出会いと交流の場づくりを行う。